



善也
連理乃梅
酒

^ 13
2935
1



門へ13
號 2935
卷 1

春色連理棋序

昭和九年九月
日 晴 未

人あつばいふ小浮あやこもらぬ
枕ふ通ふ夜半に梅が香とけん
偶然ふ縁よりし宿の書はせまら
影ふらぬかたむ。窓の濡衣着
ころりやうや。實は梅ハ武士の報

春色の編序

春色の編序

河連をよめ。色を寄を莫少と軍
と忍雄といふれん事其謂と
あはれもつらむを執治ふ。舟の
梅ありと云。軒端乃梅子
或部は標後のそらのせれ今いまふう重かさの

神の毒よハ二日酔乃後唐も
麻一々。云頂らた夜九
星をせと神二二之輪袂と出
葩ハ梅屋舗乃茶産あ
小毒の地名を甘くす余。其活
女房よ命もさつるを釋

春色初編序

春の巻

作者乃女あれ。落し梅暮

里の作号小因之連理乃梅

此一株あり。二世合我し及

筆先不培りて花は書りて

くめく見せく后實のりてを

結ぶ仕組あり。編を継徳の

梅曆開くやけの夢の物

初をも恵子の板元が御得意

きぬの女も志れた此判

初づみとつみか

花の屋

春の巻

春の巻

春景色 刀馬 二



擬源家
おき

玩玉亭
新の夏
おき

比ら
中
擬
席



柗櫻色繪の如智書年

擬源家者伴者
おき

常の初者の里小母状と兩個糸く後居と
 もえぬのこあはれ
 本流布子の垢染一形ふ
 望きくんの海と

孝貞
 両令の娘 お梅

梅暮里谷二述



あり折離お身の上一切の
 災厄をぶつて後の具あり
 離ありひと母とるつひ
 蓋をぬきおのり
 母子の身体を
 ぬきおのり
 梅暮里谷二述



春色の扁

お梅をぬきおのり

梅暮里谷二述



美言あも

あきたちうで

花柱うか

魯鈍翁

春色連理梅卷之一

江戸

梅暮里谷我作

第一齣

標列^{めいりゅう}伴丹^{ばんたん}の扱人^{にどん}鬼貫^{おにくわん}が發^{はつ}勺^{しやく}小骸骨^{せがね}のうらを
 化^{くわ}務^むて花^{はな}見^みふ家^{いへ}と悟^{さと}つて人^{ひと}まばああめく小野^{おの}と
 りい^{りい}たは生^{なま}秋^{あき}の翁^{おきな}ふ感^{かん}どてら妻^{つま}と錦^{にしん}島^{しま}の
 膏^{かう}し^し石^{いし}そる。夜^よ半^{はん}の契^{ちぎ}りをい^いり^りふ^ふは悟^{さと}まる^{まる}の
 ち^ちは^は親^{おや}見^みあふ。若^わ常^{じょう}をうけ^けら^らこと^{こと}あ^あま^まが^が身^み竟^{きやう}

春色連理梅卷之一

迷まよが恋こいなるを迷まよりぬてふら匹ひつ交ま匹ひつ婦ふのあまを
 志しぬ情なさけあゝのまこれま迷まよひあんな男おとこ女よめのあま心こころを
 とま字じは志しぬまあまぬま地ち人ひとのま能あたきま一いち
 あまづ物ものて物ものてあま合あ物ものとまものまつまらまのま中ちゆう圍い
 とまままのま務むのま相あ対たいもま遍へんりまくまてま暗くらくまぬま身みさまく
 世せらま成なり母ははとま欄らんこまづまれまてまあまあま一いち心こころ小こ鹿ろくまくまくまくま
 てまらまあまらまくま小こ止と途ともまあまぬま一いち心こころ小こ鹿ろくまくまくまくま
 恋こいのま意い地ちさまらまくま小こ我わがま身みもま志しぬまるまどま我わがま心こころもまあまらまくま

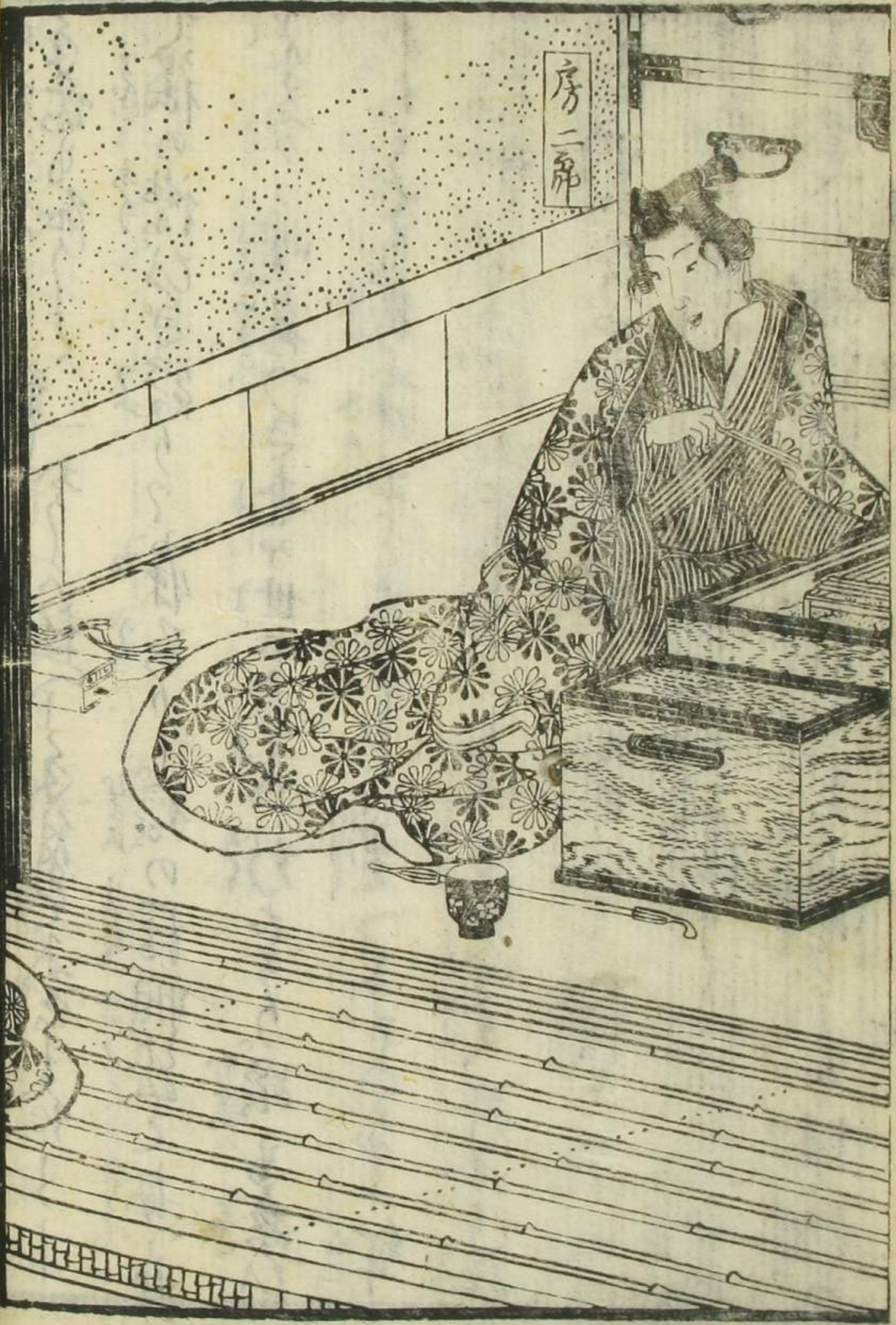
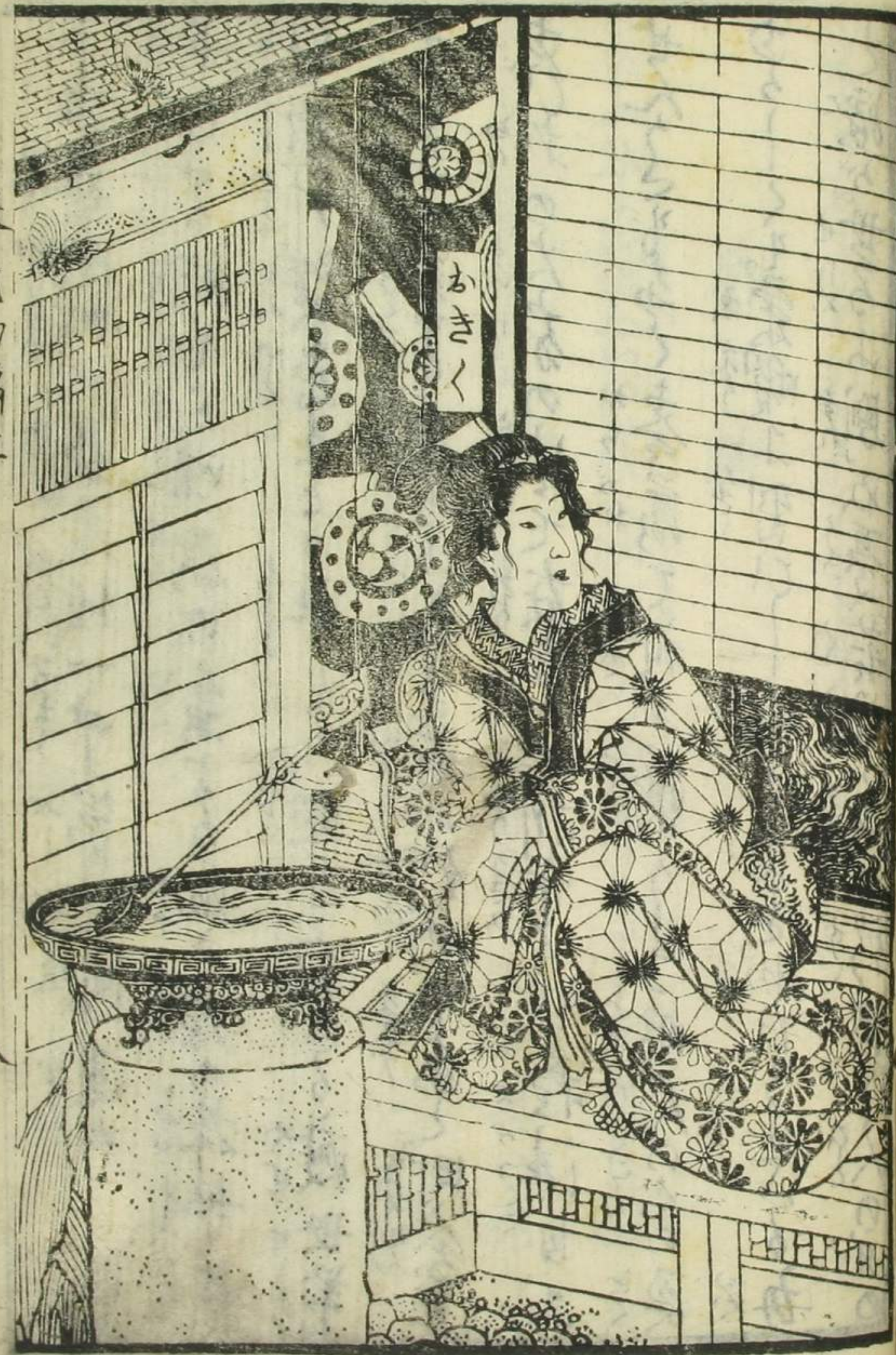
つらま台たい性せいどま律りつをま原げん世せ小こ時ときままじまきまはま説せ小こ葉はがま
 糸いと濡ぬれま和わ合がさまくま一いち我わ意いよりま物ものこまらまくま又またさまらまくま
 果はらま互たが抱いだきまつまたま他た人ひともま入いらまるま和わ睡すい能のうのま膝ひざもま
 余よをまあまげまらまるま相あ對たい火か并へいのま燈あかりもま射ひをまけまてま行ま中ちゆう
 火ひ著ちやくりまてまさまらまぬま書かきまてまはま火か水すい糸いとのま側かたはま志しぬま
 糸いと原げんさまらまくま同どう様やう小こ原げん一いち字じをまあまらまくま白しろ齒ぎのま娘むすめ今いま茲ここ十じゆう九きゆう
 井い葉はたまるまべま一いち最さい繁はん密みつなまらまるまはま雙ふた形かたち丁ていさまあまらまくま一いち紙かみり
 られま爪つまをまままのま懸かくまさまらまるま後のちのま娘むすめ志しぬまるま能あたきまべまらまくま

三巻の刀編上

母状の目を覚えー 母コレおきくやお葉がうや眼を覚
 一なるヨひどろろあさきろろおきくやとゆり記され
 て眼を覚えー。あつりそんまば誠がたあさる。母と枕を無
 くる。是思ひ孫の愛あをわりりる。兼ヨヤまア松ア竹
 兼一もこもこままーん 兼一こもこもこんあふ面
 了をさくらわいたれてお葉ハ狗小ヤッグリあんと言ひ
 内院のうらち明をさーあままで。田力と流珠の愛あれば。
 如竹あふこやゆまけんと思へば流石處女さふ。母の

母も知くー 兼一かうい福下を信じてふ。おまがー
 て徳の襟ひき冠りの森あり。娘の好相孫と母と
 かんまが、嘆息つきせが世であふ好をうり。娘も恋ひ
 あちちをも。あふけぞとあさる。世つるりのあさる
 あをさう。流石娘小遣るとても。晴て和合ま婦陣。孫
 をもせむごの母あ。妹しきとせあふ。八位子あさる。娘が
 流石ぞと娘のんらと分て。お葉小派さーらむと女状の
 情あふ。意這祝子の存命ある。今うしを信ず。流石

去白糸初編上



去白糸初編上

き寮明町の長屋住一申節の作函をして。
 世にける綱も之味強の糸より細き娘の持母も昔
 賃燈針賃糸をとる車とり。廻一程なる瘦世帯。
 ちうちうと書きて身の上あま昔ハ何町の素と町人かぎ
 ぬびねの大家の生で在あが。折市り一程津目ふ。
 せんこもあくまを成て袖ふ派のうらうら時。人の心の突
 ちうーくも。榮耀不習ひ一藝ふ身を助けくまこ。母
 と娘が世らふ馴ぬ憂々若常あひの影樹と人の身。
 果とあくまぬりのあそありけぬ。

第二齣

ちうちの縁念の横濱町小面庫さくさく。格う子
 造りの質店あり。主人の近は世をちりて。子長ハ病身
 け質具まうこ年り更ざれば。幸店の流居あく。又酔人
 の初ハ。中を廊を任せ。一。隠居所とふらあう。存ども。
 店と好堂との申度の中へ。隔ふま。本のと。植並る。生植
 の向如ふ。根一亭の障子の裡。あら。肉子の扱。行。若

御膳手帳

ふん 物案ト 側小居侍婢のおまことりふと身久金
はひ 別々の中年増。多岐あがく女同志はたかの袖ふも
録りつゝ。ふあどあまがたの右のと。お侍をさくむる中おれ
バ火并の志を獲あぐ。私もさく探らて健くはま
ふあろく金づくでまを切うと探さしてもそれハむごで
ぎのませう先の女が若旦那さぬ小極の儘落ぶ。若旦那
さぬも又大そ小惚てお在ら減まけう相惚とやうで
おまのまはまの。ととむむうううごまのまヨ母おれで

うら余もまて小昔学ごまナ然してい張ハ房より歳も
更をうらう誓古所を出して店へ嫁ごう。嫁ふかりやと
知が惣お中をふ兼知ごらふ。それなら又お家うふおま
如を是非房の所へ嫁ごふといふをれ。小味てつるの
本おのこをわあう。一又ごごふまをばそれおまお女も嫁
一がんで照方へ来るの気味。一まふして店をといふとごうご
で房のんが事弱と本店へ對して謝ねたうとら勤八
代の店ごう。嫁後ハ麗女へても物大。事ふわうりも

御膳手帳

あつらうらと男を王^{こぞ} 狗^{いぬ}の^{しらべ}一杯^{いっぱい}不味^{あじ} 一^{ひと}ホ^お二^に方^{かた}物^{もの}で^で

さういふねむ^{ねむ}たう^{たう}い^いが^がん^んお^お来^き和^わの^のあ^あ且^且於^於さ^さぬ^ぬぞ

ら^らあ^あま^また^たう^うと^とれ^れの^の王^{おう}と^と重^{おも}理^り不^ふ離^り別^{べつ}あ^あそ^そを^をせ^せと^とし^し

う^うら^られ^れ業^{ごう}知^ちも^もら^ら城^{しろ}ま^まま^まま^まの^のが^がの^のの^の処^{ところ}と^とせ^せと^とし^し

り^りは^は本^{ほん}お^おの^のお^お腰^{こし}さ^さぬ^ぬを^をは^は形^{かたち}造^{ぞう}さ^さぬ^ぬは^は味^{あじ}あ^あい^いで^でも

形^{かたち}の^の不^ふ理^りお^お家^{いえ}の^の大^{だい}本^{ほん}も^もあ^ある^るこ^こと^とと^とう^うと^とう^うと^とう^うと^とう^う

が^がは^は異^い人^{じん}を^を控^{かま}へ^へと^とう^うと^とう^うと^とう^うと^とう^うと^とう^うと^とう^うと^とう^う

ま^まの^のあ^あく^くぬ^ぬと^と強^いて^てら^らあ^あは^はら^らせ^せら^らせ^せら^らせ^せら^らせ^せら^らせ^せ

ち^ちう^うじ、^じ一^{ひと}然^{ぜん}サ^さと^とう^うも^もた^た板^{いた}男^{おとこ}あ^あが^が色^{いろ}帳^{ぢょう}を^をう^うり^り互^{たがひ}不^ふあ^あつ^つく

第^{だい}一^{いち}序^{じょ}を^を焼^{やく}く^く波^{なみ}是^しの^のや^やと^と靴^{くつ}穿^はき^きの^ので^で穿^はき^きの^の面^{めん}倒^{たう}ごと

思^{おも}へ^へと^とひ^ひよ^よん^んあ^あて^てこ^こも^もあ^あの^のめ^めの^のい^いづ^づう^うと^とあ^あく^くぬ^ぬを^をと^とて^て居^いる^るま^まあ^あ也^や

先^{さき}の^の最^{さい}者^{じやう}が^がう^うと^と母^{はは}娘^{ぢやう}が^が列^{れつ}合^{がひ}を^を居^いる^るを^を欺^{かた}し^した^たま^ま矣^やを^をも^もは^は

中^{ちゆう}の^のう^うら^らの^の行^{ぎやう}畧^{りやく}ご^ごと^と思^{おも}は^はこ^こう^うと^と秋^{あき}風^{かぜ}の^のう^うら^らご^ご財^{さい}直^{ちく}切^{けつ}を^をも^もお^おと^と海^{うみ}と

う^うら^らん^んつ^つて^て居^いる^ると^と処^{ところ}が^が大^{だい}お^お透^{とほ}て^て何^{なに}か^かあ^あり^りの^のり^りは^は通^{とほ}り^りを^を

ま^まけ^け ^{その}お^おま^まめ^め ^いま^ま ^いま^ま ^いま^ま ^いま^ま ^いま^ま ^いま^ま ^いま^ま ^いま^ま ^いま^ま

い^いま^ま ^いま^ま ^いま^ま ^いま^ま ^いま^ま ^いま^ま ^いま^ま ^いま^ま ^いま^ま ^いま^ま

春野夜編一

あゝまゝにさうしよしん先を舟一 左様でおごのまゝアせん体

お嬢さんお嬢さんのハア泣き泣き振づくをれうと被女子ハ別ある

旦那さま旦那さまの内およう所よりおきてお直に家々〜宜とおご

ませうよ「さうもいふまい」を振て〜お直に家々〜

よりくまゝにさうしよしん先を舟一 直本家ハお直に家々〜

ると始末やハなる房の爲お悪う子 「左様でお直に家々〜

ねへ候くお直に家々〜お直に家々〜

上りく一個づつひふお直に家々〜お直に家々〜

お直に家々〜お直に家々〜

是らお直に家々〜お直に家々〜

旦那旦那が「居三席がはなす」お直に家々〜

お直に家々〜お直に家々〜

りお直に家々〜お直に家々〜

それよりお直に家々〜お直に家々〜

お直に家々〜お直に家々〜

お直に家々〜お直に家々〜

お直に家々〜お直に家々〜

1 江戸の風情 巻ノ下 四ノ目



十四



おとよ

若也 秋 上

十五

子邪魔たるはかりまはるとはんくから生るんころ又その
 様様をお直さーパス極子の難ーのころモウんあふ
 可免らーうさざいませうとヤシまーいヨ 母「あつ
 とかの家のけのく 母「ハイお旦那さぬが連れて入らこふ
 でおいませ 母「コヤ然久アお直志おひ松がんをあん
 どてあの二房をちぬく後をかうかして呉るのと大伴さん配
 でおいのころこれ自身のもひいらで腕を養ひけう
 母「平生お直自はぐちぞりやー然り小娘を貰って

娘ははうのあつそれのモウんあふのふかうしてて原の西
 ちも直ちの遠あいつの思のみの本お持と然りあつは
 まてお直といふ結縁因やうの縁のあつー何う困ら
 めのうさ 母「左様サお直さぬも先達うう悪旦那さぬ
 ちから惚てお直ら申内極子ごう西京婦お直さぬの
 ちごも申しーお直いけいませうヨ 母「おそれらぬも房が余
 り懸ーらう様直小直まるのころ本お直のさうくもまど
 免行人あふも可免さうまらぬねも様ーいさハテ秋

若色不知山

いよと女の情り人よ可憐が〜ま〜ま〜

あんどまう〜人形心願の〜

はく〜う〜あ〜あ〜う〜う〜

丁亥を〜うんちち〜

あ〜う〜は〜は〜ん〜ん〜

〜を〜あ〜う〜人の口〜

ありま〜〜う〜此〜る〜法〜本〜店〜の〜お〜ね〜ご〜ん〜が〜

〜の〜ま〜〜〜時〜松〜小〜彫〜〜

此〜の〜書〜次〜さん〜が〜ま〜ま〜ま〜ま〜

お〜も〜あ〜〜と〜情〜を〜隔〜紙〜の〜糸〜で〜

このせん〜ま〜ごん〜る〜

〜と〜女〜形〜買〜た〜る〜を〜と〜

お〜人〜さん〜お〜今〜夜〜は〜

あ〜ら〜く〜は〜こ〜ら〜あ〜い〜と〜

そ〜の〜縁〜へ〜お〜又〜極〜が〜

〜の〜の〜ま〜ごん〜ま〜ま〜

〜の〜の〜ま〜ごん〜ま〜ま〜

春色不細上

せうごう書院さんごうにまうしうを且ねさぬがむゆ
 拵あそびぐらうのめいけいけいあふりあうごううへに
 あいりあうの廊通のこれ藝古呀ののきをさるから
 ていあうのいん梅子をかんこうで止ぬてあうあう
 られたらうごううらうらうと係後せんあまのあうの
 お嬢さぬお嬢がお嬢拵ぐらうのこれハモウどんあうあう
 お在らばまうらうらうか可也たらうあうあう
 じョトまはくごうあうあうあうのあうあうあうあう
 人労働まうらうあうあう

人労働まうらうあうあう

春色連理梅卷之 畢

春色初編上

十二

春色初編上

春色連理梅卷之二

江戸

梅暮里谷峩作

第三齣

目 後野きく

とのよ妻れと敷一松子のうら落ふ赤肉の
 松子とて袖曲者松耳をそぐら 松うらまきこめ来
 うら田方波曲者をみるよりも提灯かんと吹消しそ
 為侍を窺いども夜更さうら鳥表たるまばらひ不徳と
 ち安も分明うらぼぼぼ時中門の番四五疋の大起

春色連理梅卷之二

三浦 三浦 三浦

あめをんくやうあつとせえていつて
房さんおまさんおまアお体おまお母人さん
お陽りでも私が起て居ますらう宜子房「ナニク
私も起て居るヨおまの格お隣おのうく生
まば私のぬおら大子お姑ごめヨ「ヤヤら色
しのお実心お慈おのうおらま房「実も
虚もあつものうあつりまごア福さうと姑と
おのあいのヨ「あんとおひびご房「あんとお

お母人とおのりて居るのサアお親でいおまお私
お母人もお慈つて善人ごう又此方の母人の母人厚直
人おの他の子実子の差別おく可おごうう他
月々お舞ごう息子ごうううまおお状お私合
して居るお見お支個おお併一個おお
とおの「お思つてお私おおおおおお
おの「おおおおおおおおおおおお
おの「おおおおおおおおおおおお
おの「おおおおおおおおおおおお

三浦 三浦 三浦

うねく「い、工房」それだやアどうしてんじョー

「あれさまア、は、極小く居るら
こころあいううとんをおんせヨト

「あれ
採ッ、い、ヨト、良をあげてあつてらつて房二席の

息とあつとんつめ「房さん今丁を郵中よく

「おんま、い、おま、い、うの、二、歳、も、上、で、う、う、おま、い、さん、が、互、流、を

「おんま、い、おま、い、うの、二、歳、も、上、で、う、う、おま、い、さん、が、互、流、を

「おんま、い、おま、い、うの、二、歳、も、上、で、う、う、おま、い、さん、が、互、流、を

「おんま、い、おま、い、うの、二、歳、も、上、で、う、う、おま、い、さん、が、互、流、を

「おんま、い、おま、い、うの、二、歳、も、上、で、う、う、おま、い、さん、が、互、流、を

「おんま、い、おま、い、うの、二、歳、も、上、で、う、う、おま、い、さん、が、互、流、を

「おんま、い、おま、い、うの、二、歳、も、上、で、う、う、おま、い、さん、が、互、流、を

「おんま、い、おま、い、うの、二、歳、も、上、で、う、う、おま、い、さん、が、互、流、を

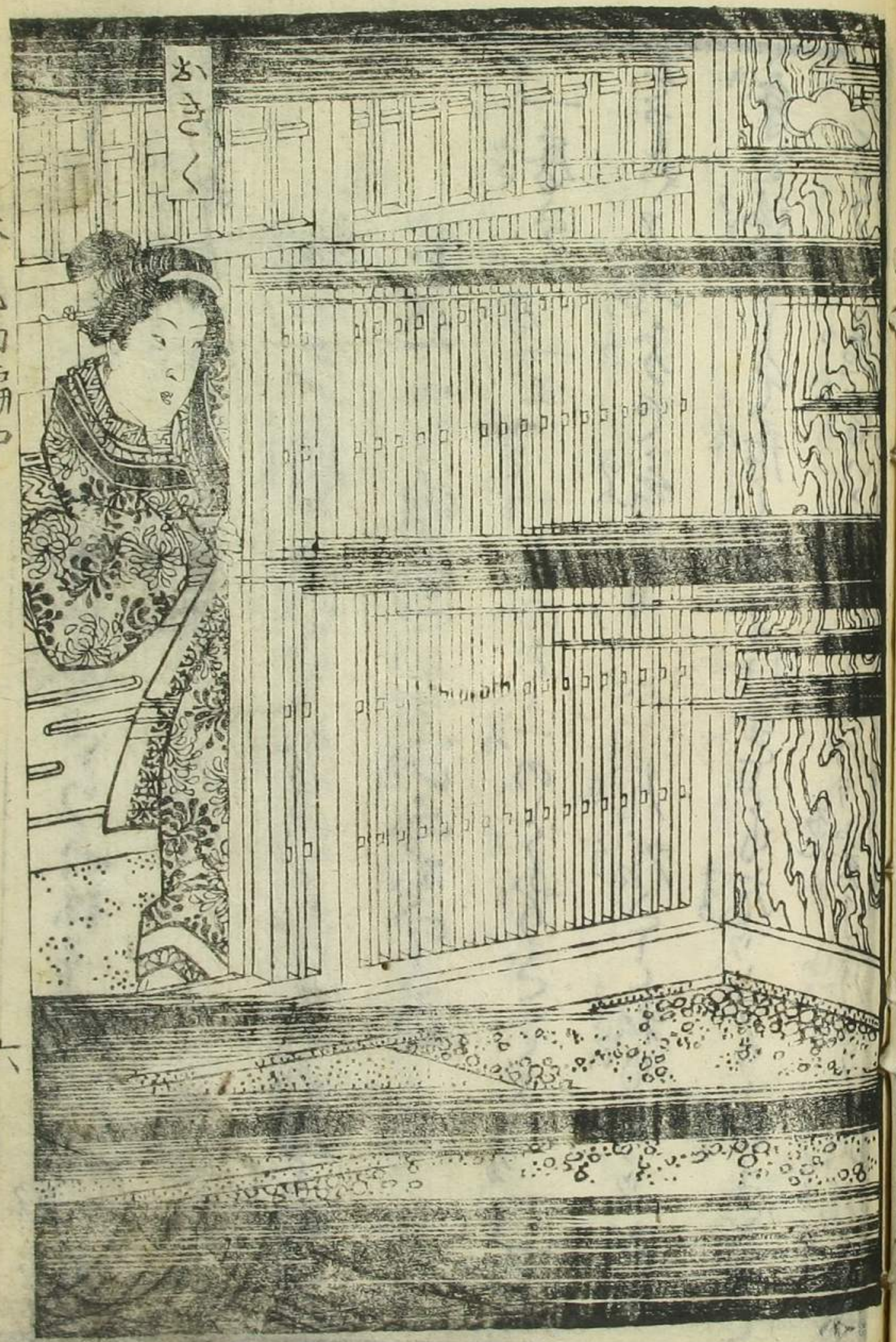
「おんま、い、おま、い、うの、二、歳、も、上、で、う、う、おま、い、さん、が、互、流、を

「おんま、い、おま、い、うの、二、歳、も、上、で、う、う、おま、い、さん、が、互、流、を

「おんま、い、おま、い、うの、二、歳、も、上、で、う、う、おま、い、さん、が、互、流、を

春色初編

春の初め



六



春の初め

七

春の山
春の山
春の山

るりの子さうして私の方へ引取ておまさんお持がせ
ちやアおまへさんの母人お對して私が涙あいうけして
ほろほろと涙あふさうでなのヨ「それでも私ごって男ご
うう竹うして持がア子「持がうせるとおらうけきど
うせぶふとさういそ色を持でるは先ご福く「三麻ア
云福へおまへの糸お女くしりおのいせらんあやア
なふと思つて居るりの竹へお持まこつて色おんざア
あやアーあいきーアッン金ありお云らば此方もあひき

ナんがお花さんをたどめて連れておびお味ご時のおまさん
さんの息つきとりのおのいそれハモウ管付ておげのいさう
ごコも可憐ら〜の眼を又のう〜倍うらあ〜くら
で程の圓くとわうり云てお存ごりのごう〜お花さんら
あぶあ速があおまさんのおとをうら〜云て居るお
さんお花持て貫ごのいさうお云ま〜ことッサそれごりんご
う〜お花さんお身ら是くごと私ごちの〜とをま〜う〜
それハモウ流〜がう〜悔〜がう〜困りさ〜こと云く

春の山
春の山
春の山

色不列中

再昨子お滝さんが来ておまう〜まう〜さハ房方方格格之

そのあアおアアあるまへアたんとおごつてほでも

欣のましくおきあおまうさんごおめ一すておかりごと

花女もさぞうくみませうこのさうり覚悟をくてらお茶

房房「何故せくき」不他の娘やお藝者子おやさくくくて

おきらお茶ころアア命いのちをささ〜牛ご〜てらお茶とお茶を

ししサ房「ハミミ〜とアア又ま〜のの理りでで「茶茶をを〜

ゆ〜他他でもも死死ららきておおらんらつつまま〜ああのの者者松松計計り

ごご子子それそれよりよりりり寧寧下下おおひひおおままさんさんをを突突ころころ〜

私私もも共共小小死死でで志志まま〜方方がが茶茶ををももんでんで他他人人不不〜

まま〜よりより遠遠まま〜どどののヲヲ「そののつつりりでで何何ごごのの被被ご

ののとと面面倒倒〜〜連連立立不不免免でで志志ままをを方方〜〜アア、それれご

うう〜此此乃乃私私もも然然ヤヤ〜〜互互不不親親〜人人子子まま〜〜就

達達がが何何もも不不通通をを云云〜〜候候初初のの義義理理ああいいてて形形礼礼

〜〜象象てて存存〜〜理理ごご不不周周ててそそをを我我意意不不先先〜〜免免〜

余余りりまま〜〜ああののととおお云云〜〜アアああいいりりトトおお〜〜茶茶がが理理不

一茶の理不列中

落し思ひの夜更けの眼と眼さくらのむらゑの要ふ
互小情のさそくへ務むあはぬ容色さく人なき
さく羨しき梅と柳の處女と少年いと羨しき一對
のあまのり合さてめまの身の上のふたつをえんころ
のこもきこころり

第四齣

清元

あまのり合さてめまの身の上のふたつをえんころ
のこもきこころり

あまのり合さてめまの身の上のふたつをえんころ
のこもきこころり
あまのり合さてめまの身の上のふたつをえんころ
のこもきこころり
あまのり合さてめまの身の上のふたつをえんころ
のこもきこころり
あまのり合さてめまの身の上のふたつをえんころ
のこもきこころり

常盤津 静かま 「あまのり合さてめまの身の上のふたつをえんころ
のこもきこころり
あまのり合さてめまの身の上のふたつをえんころ
のこもきこころり
あまのり合さてめまの身の上のふたつをえんころ
のこもきこころり
あまのり合さてめまの身の上のふたつをえんころ
のこもきこころり

春色初編中

春色初編中

三巻五行終

九十一

モウ源流トヤア往ハ行をんても山家育草始を
げんきう いづれ やまがき あひ
 了モ志々ト往ハ變ハ變りりのご
うんれ く い せ ん ご
よね え ち あ ま き ち え ち ま ん き ち え ん ご
 兼ハ仇者ハ樓で候始喧喚ト
あ い は し め い ん ご
ま い ら の と サ 子
 然ヨト付分トヤア已もまご拵く友妻の好小隨後に拵
ま い ら の と サ 子 あ い ら の と サ 子 あ い ら の と サ 子
 不引付分トヤア
あ い ら の と サ 子 あ い ら の と サ 子
 一ハと思つて由一
あ い ら の と サ 子 あ い ら の と サ 子
 各歳が著二筋及の世界ハ九ツきり志々往ハせまご
あ い ら の と サ 子 あ い ら の と サ 子
 卵ハもあつ往ハ付分トヤア
あ い ら の と サ 子 あ い ら の と サ 子

子ト死ハモシ北里の返り何トヤア
あ い ら の と サ 子 あ い ら の と サ 子
 合子まよよこキ一ツてんりやア
あ い ら の と サ 子 あ い ら の と サ 子
 て好まけやア私トヤア
あ い ら の と サ 子 あ い ら の と サ 子
 有ハ一ハ翌日ト是非ハ入ら
あ い ら の と サ 子 あ い ら の と サ 子
 是非ハ何トヤア
あ い ら の と サ 子 あ い ら の と サ 子
 トヤア往ハらぬけでもト
あ い ら の と サ 子 あ い ら の と サ 子
 一ハ内儀が童児の使のやうハ
あ い ら の と サ 子 あ い ら の と サ 子
 此ハもまよよこキ一ツてんりやア
あ い ら の と サ 子 あ い ら の と サ 子

一巻の編中

十一

静

おろいもろ福おめで茶あま

静 一 実じつ不ふ感かんんんののりりああままでで今けふ日日ののおおままままののりりらら 由

おろおろぎぎふふ賞あづか賞賞美美のの 静 一 破やぶ風かぜのの娘むすめああののてて不よ能能ささののまま

けけ子子モモシシ秘ひ傳でん古こ所所ででもも押おし出出ままししつつりりうう子子 由

ごごうう 静 一 ハハテテ子子トト 由 一 何なにもも不よ守守不よせせじじ

とと何なにトトややアア福ふくくく 静 一 何なにもも不よ守守不よせせじじ

福ふくくく声こゑむむららりりでで女をんなのの足あしせせじじらら 由 一 何なにもも不よ守守不よせせじじ

ここめめんんをを 静 一 何なにもも不よ守守不よせせじじ

ババモモウウ一一女をんなおお徳とく子こををくく 由 一 何なにもも不よ守守不よせせじじ

ナナ 静 一 イイエエササををくくおお定さだ合あおおつつてておお船ふねののううびびふふモモシシかか 次

のの流ながああどどとと云いてておおららししめめららししモモシシくく来きててままらら福ふくくく

おおままささんんごごヨヨンンはは福ふくふふぶぶびびくく来きららとと大おほ且おほ形かたちささふふ

いいつつせせててききヨヨももどどとと名な地ぢ云いままららししてて

ああけけらら 静 一 ホホイイととままららししらら 下した女女一 何なにもも不よ守守不よせせじじ

いいままららししらら 静 一 何なにもも不よ守守不よせせじじ

かからら福ふくエエ 静 一 ヤヤメメ入いてて居ゐららしし 下した女女一 何なにもも不よ守守不よせせじじ

静

静かなる夜



静
右
文

探幽



中
之
助

春色初發中

春の連理梅

居あいのう栞「ハ一有ありごうふごせいのま釋「エハ一く

あ返形ごん分ぶん一いち件けん一いち波なみ福ふくくとあつしゆるなマ

このおもりのまがあらうくご子こ宜よろごせまには春はる

亭ていの科か理りををりりトトやや兼せう知ちししまませんせん也也勉めんも

今いまののここりりかかりりふふくく貝かいののふふららうう若わののああままごごちちうう

ふふ栞栞下下女女「オオホホミミ」釋「ヤヤ入入ああいいごごね

私わたしハハアアああいいととままごご由由「ああせせままやや宣のりやや私わたし「おおねねたたふ

ああららももののままがが利き「利き福ふく子こああんんののここ音ね障ざうもも云いてておおるる福ふくく

ととああ返ごん形ぶんハハ疾あや面めん皮ひごごうう由由「ナナ二二おおりりろろくくもも福ふくく

私わたし「アアハハ十二じふに実じつハハ今いま私わたし初はつ末まつのの客きやく人にんががあありりままごごうう

トトそれそれくくみみああいいままんん終はつららおお栞栞とと中ちゆうののままりりてて

ささくくむむううひひああいい同どう士しとと何なにとと中ちゆうのの悪あくささううをを風かぜ情じやう

ああてて志しをを一いち切きもも途とぎぎれれううりり今いまここののああままがが形かたち客きやくハ

おおまま是これ

ややぐぐてて開きははななををここれれ梅うめのの白しろひひううみ

春色連理梅卷之二畢

春色連理梅卷之二畢

春名色初編中

春名連理梅卷之三

江戸

梅暮里谷我作



第五齣

強面人を恋とて山びこの春さるまを歎きつらう
 そまふも似てる有さぬや。金多たのぶ家ある娘おま
 らふくと心うらなげ嘆ひらう。思ひやつきし恋衣推見附
 まうごとくは出好造さぬの由亭と又のこと。あそび就て申
 ようふ。宵合はゆる年不あうくとむらり袖小のこ。おひ

春名色初編中

君を色不...

おまはるまはふらくるおのこは息づめの人らだら「あんどらはいこうはいくらくく

あらはらむく「おい私ごらりの池知らして居ても何もも

後をサアあいでらお解拵づ「まはらまの福豆ア」

今もあらはらく横濱町ののお目取らぬが此のあらくを

らあ入らぎらひらはらぬを「お目取らぬのお目取らぬの一野」

お目取らぬのお目取らぬの「お目取らぬのお目取らぬの」

お目取らぬのお目取らぬの「お目取らぬのお目取らぬの」

お目取らぬのお目取らぬの「お目取らぬのお目取らぬの」

お目取らぬのお目取らぬの「お目取らぬのお目取らぬの」

お目取らぬのお目取らぬの「お目取らぬのお目取らぬの」

お目取らぬのお目取らぬの「お目取らぬのお目取らぬの」

お目取らぬのお目取らぬの「お目取らぬのお目取らぬの」

お目取らぬのお目取らぬの「お目取らぬのお目取らぬの」

お目取らぬのお目取らぬの「お目取らぬのお目取らぬの」

お目取らぬのお目取らぬの「お目取らぬのお目取らぬの」

お目取らぬのお目取らぬの「お目取らぬのお目取らぬの」

お目取らぬのお目取らぬの「お目取らぬのお目取らぬの」

お目取らぬのお目取らぬの「お目取らぬのお目取らぬの」

お目取らぬのお目取らぬの「お目取らぬのお目取らぬの」

お目取らぬのお目取らぬの「お目取らぬのお目取らぬの」

お目取らぬのお目取らぬの「お目取らぬのお目取らぬの」

春を木ぬき

こゝをあたゝんでからヨ 弟 お「十二あちや中サあの一」
こゝうりききせん子それううた振中さやう「いま〜」
だんぢ あはれ
旦那さぬがらあはれまじららイヤサ えんま 婚礼をせせら
おらこじがーおれ「まじらぬ今が今をもある〜」
さしや支記入うううううううううううううううううううう
まうの候みあはれサをさで房がはらう〜
今うううの候あをあふされたらたま〜
〜日初をかんて居あが〜察明町おまきんの〜

間々の入々容子を捜〜
〜中〜は〜今〜の〜知〜ら〜合〜子〜づ〜で〜あ〜ふ〜と〜を〜
切〜
お流花〜
ござい〜
あち〜の〜お〜
旦那さぬを並〜て〜
旦那さぬを並〜て〜

一巻の目録

新編 浮城物語 八十八回



おま川



おの丸

新編 浮城物語 八十九回

春の山
春の山
春の山

房さんく〜可也グッておわけらば来ては湯へあそびせ

とまのキウの旦那もいつら察明町の〜あんなぞいぢいぢい

あ〜〜からうらさ〜あ〜お可也が〜ら〜あ〜

あそびも〜然〜早くお可也を〜〜

「ホ〜」ゆ〜ゆ〜お可也が〜

今〜旦那も〜お可也〜

モウ御小ぢ〜

あ〜〜

ら〜

さん〜

ごり〜

沈む〜

病で〜

と〜

さ〜

あ〜

春の山
春の山
春の山

春の巻

おと女とあしづいてさふ及び。あきくかん中
いうあしづん。とも形手で女不意い。うき方二席と
如何ある生を。岸鳴好男子ふと何が味ワ。
作者もあしづい。小豆くま。千ヨツ是うう又お若と
相我説向と。嗣海一可ら解

第六齣

春もあけしき。新月と梅の植木。花無ぶ所研
布り。うらあしづい。ぬ縁日ふ。まごうを。あきく吹

うせぬあげる色あた。高人が。花店。の灯。あしづい。
男女の群。花。河。味。く。く。ぬ。名。余。氏。が。梅。の。例。ふ。終
終るを。種。く。人。うら

おと女とあしづいてさふ及び。あきくかん中
いうあしづん。とも形手で女不意い。うき方二席と
如何ある生を。岸鳴好男子ふと何が味ワ。
作者もあしづい。小豆くま。千ヨツ是うう又お若と
相我説向と。嗣海一可ら解

春の巻

おてしとたか(おま)さむたの(お)お(お)お
らんお(お)お(お)お(お)お(お)お(お)お(お)お
きん(お)お(お)お(お)お(お)お(お)お(お)お

「イヨ大和や引」
おやまの(お)お(お)お(お)お(お)お(お)お(お)お

お(お)お(お)お(お)お(お)お(お)お(お)お

お(お)お(お)お(お)お(お)お(お)お(お)お
お(お)お(お)お(お)お(お)お(お)お(お)お
お(お)お(お)お(お)お(お)お(お)お(お)お

お(お)お(お)お(お)お(お)お(お)お(お)お

お(お)お(お)お(お)お(お)お(お)お(お)お

お(お)お(お)お(お)お(お)お(お)お(お)お

お(お)お(お)お(お)お(お)お(お)お(お)お

お(お)お(お)お(お)お(お)お(お)お(お)お

お(お)お(お)お(お)お(お)お(お)お(お)お

お(お)お(お)お(お)お(お)お(お)お(お)お

お(お)お(お)お(お)お(お)お(お)お(お)お

お(お)お(お)お(お)お(お)お(お)お(お)お

お(お)お(お)お(お)お(お)お(お)お(お)お

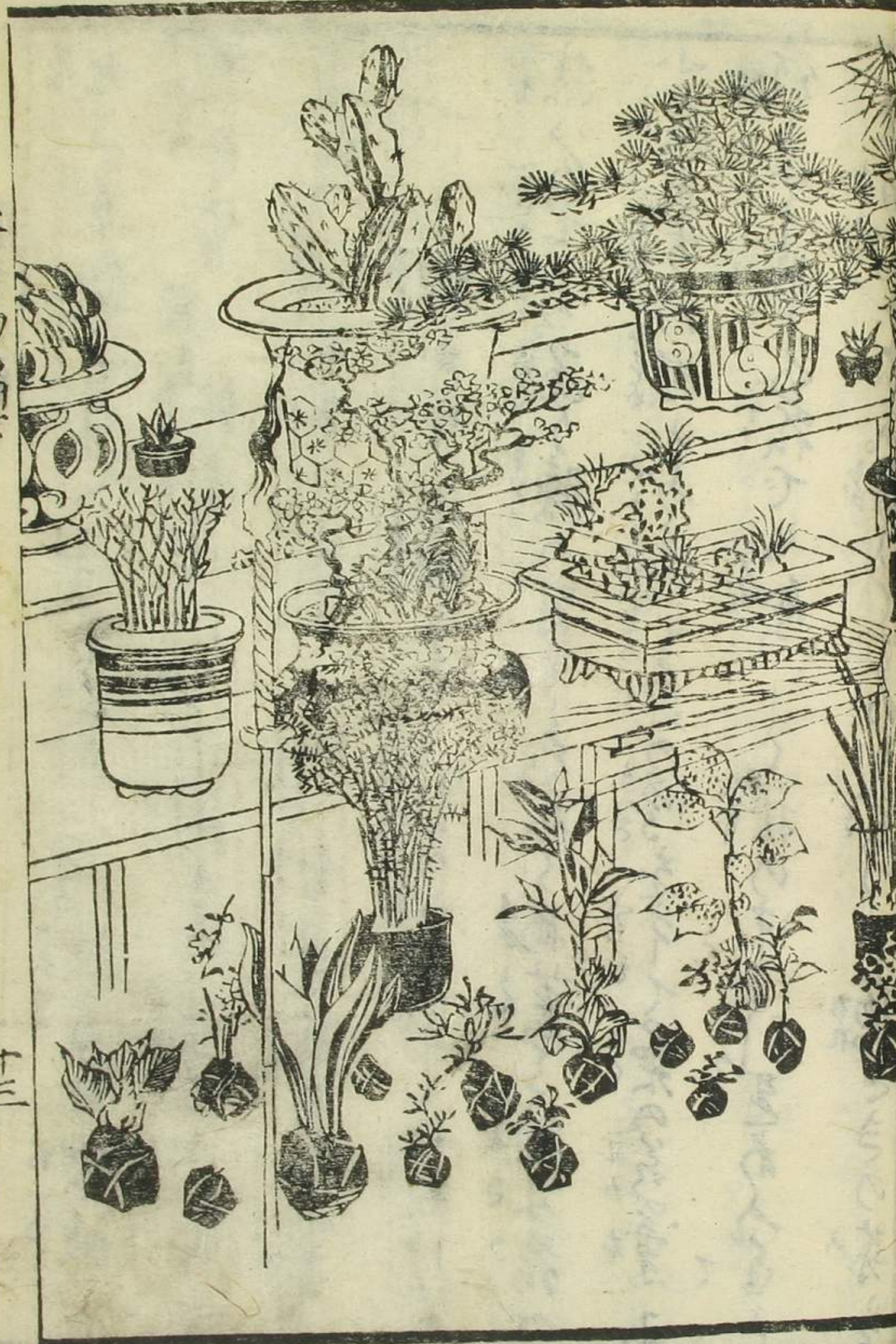
お(お)お(お)お(お)お(お)お(お)お(お)お

春色新録

頼んどどわア福くら。〇「アア坊が覺帝を
んてくアア福くら。〇「アア坊が覺帝を
好扶御工がわつて様こたあハハハ。〇「アア坊
ら久くハハハ。〇「アア坊がわつて様こたあハハハ。〇「アア坊
大体止宿あるからアア坊がわつて様こたあハハハ。〇「アア坊
宣地傍で。〇「アア坊がわつて様こたあハハハ。〇「アア坊
志ようぜ。〇「アア坊がわつて様こたあハハハ。〇「アア坊
居るといふことお教さぬヨ。〇「アア坊がわつて様こたあハハハ。〇「アア坊

〇「アア坊がわつて様こたあハハハ。〇「アア坊
そのお年ころ。〇「アア坊がわつて様こたあハハハ。〇「アア坊
〇「アア坊がわつて様こたあハハハ。〇「アア坊
黄令がわつて様こたあハハハ。〇「アア坊
男がアアの字でヨ。〇「アア坊
ハハハ。〇「アア坊
〇「アア坊

春色新録



丹ニ楳シ子シ花ハ咲キせシり
 梅ウメのハ花ハ後ノ居ル系ト 庭ニ阜シ
 梅ウメのハ花ハ後ノ居ル系ト 庭ニ阜シ
 梅ウメのハ花ハ後ノ居ル系ト 庭ニ阜シ

春色杯録

春色杯録

十三

ちりりいんでもなく「あせく。」「此乃も彼妓が
 然るこそせ。」「何を。」「どぞ。」「ヨリヤキを信るさせてら
 ぶぬッ。」「そまうらうらう。」「今うふお荒みきりて是
 一人「ハハハ」驛もいん駟らうら。仲る交交と一の世けん
 揉りぬる歌あり際のおぞろ。志々梅葉う植木前の
 小庭を歩み歩みとある。此の吟をうて葉の影を葉ふ
 何とぞ時一の夜にでも能う。一決の中で引是あふと
 りをか一ツたひぬ。梅りてものも若つど。惚さきの芽ら
 白夜の他人と何ともいひあ。一の夜の只中うお女う葉
 魔花の由うきと。んふん知花つど。蘆蒿とあ
 ばも。秋摘の木の葉りつ。友人一所ふまこれ系
 かくて芽お沃生んで。風鞠草とも。吟まあべ一倍
 一の影。藤松と。替りんると。合物の。互ふ實字貞
 尺あせ。」「あまききん。」「ア。可笑い
 福く。」「あまききん。」「あまが。」「
 あんあ。あまききん。」「あまききん。」「あまが。」「
 あんあ。あまききん。」「あまききん。」「あまが。」「

春色初編下
 十四

春色初集下

おぢやう
 色提ちんあゝ早見ふあけあぐり通りまじが
 しましあ人をけんぐり「ヲヤ君とあ思ひ
 卜やアさざのませんうとりあひううふ女のこゑ
 おきくも何れか合意ゆくは房二席も黙して
 二人そ知ふ不む。是この婦人と何れぞ
 あく遠知不け會てあ個がうめふをぬいりふ
 その病を翻て妻しくあるは。今遠せ牙生
 連代の梅。楮の地めん不極込で等の後めて懐い

津ん雲の齒ふけ長せを喉やぐく実をけふ
 ちのし靴者が丹精を十方の児女童男を
 あふて幾久しう。電氣あせぬと祢がふ

梅屋論谷我徳

春色初集下

無名氏
正德
古
古
古
古
古